

東アジアの漫画事情と『ONE PIECE』

— 芸術観光学の理論と実践⑥ —

平居 謙・王 娟・陳 虹彪・姚 阿玲

要 旨

『ONE PIECE』の人気は日本に留まらず海外にまで及んでいる。中でも東アジア諸国においてはその人気はきわめて高く、『ONE PIECE』がきっかけで日本語学習を始めた留学生も数多い。『ONE PIECE』の魅力は、「架空世界と現実世界が絶妙の均衡をみせて展開する」点にあり、それが必然的に「さまざまな人生上の問題を読者に提示する」ところにある。またそれがゆえに、近隣諸国との交流を作り出す重要なツール、教材として扱うことも可能である。

はじめに

尾田栄一郎『ONE PIECE』は1996年の連載開始以来、現在まできわめて高い人気を保ち続けている。『ONE PIECE』が日本語学習のきっかけになった留学生が後を絶たず、昨年日本を席捲した「ONE PIECE展」の開催が台湾でも予定されるなど今やその人気は海外にも及んでいる。

本稿では、日本および近隣諸国における漫画人気を『ONE PIECE』に焦点を当てながら確認する(第1節)。続いて第2節で『ONE PIECE』に関する<言及>の現状を概観した上で、『ONE PIECE』そのものの魅力の全体像を探る(第3節・4節)。『ONE PIECE』の魅力は作品の享受にとどまらず、日本語・日本文化の教材としての価値をも有しているが、その際の問題点を最後に記した。なお、本稿の分担執筆は以下のとおりである。

王娟は中国における『ONE PIECE』人気の変遷を注視し、厦門大学嘉庚学院におけるアンケートの実施・集計・分析を担当した。その結果の一部が第1節に生かされている。また台湾における日本語教科書の変遷を追ってきた陳虹彪は、本稿全体の校閲と中国語関連の資料を第5節の日本語教育への応用面での妥当性を判断する役割を担った。「変身譚」「異類婚」を専らとする姚阿玲は、第3節の「物語の伝統」に関する叙述の根拠を与えた。また、中国語関連の膨大な資料収集に関しては王娟・陳虹彪・姚阿玲によるところが大きい。『ONE PIECE』に関する言及史(第2節)およびその基本構造の分析(第3節・第4節)と最終的な原稿の取りまとめに関しては平居が担当した。

第1節 東アジアの漫画事情

従来「批評」は文学を主たる対象として為されてきた。それらの領域に比して漫画・アニメーション・歌詞等は「サブカルチャー」という位置づけで一段低く見られてきた。もちろん漫画に関する優れた言及や批評は既に存在した¹⁾が、大きな流れとしてはあくまでも文芸批評が主流であり、日本の現在を文学作品から抽出するという方法論自体は超えられることはなかった。しかし、「現実」は認識に先立って遥かに速く動いてゆく。内側から見ては分からない変化も、海外の若者の間で日本の漫画が貪るように読まれ、TVやインターネットでアニメに齧りつく熱心な視聴者がいるというような、現在ではよく知られている情報を突きつけられることで、既に確立された事実を知るという皮肉な体験を日本人は味わうことになる。このような内外の認識の落差が漫画の水位そのものを上昇させたのである。

海外では日本の漫画は「MANGA」として他国のそれと区別される。これは「ANIME」といえば日本のアニメーションを指し示すことと同様の文化認識である。日本人がそのじつ、最大の娯楽の一つとして享受しながらも自ら恥じるかのように「サブカルチャー」という名称の中に長く押し込めてきた漫画が、「サブ」という位置づけを超え認知された「カルチャー」として主文化の一角に食い込んできた²⁾のである。MANGAに対する海外からの反応は、フレディック・L・シヨット『ニッポンマンガ論』を嚆矢とし、現在のところアン・アリスン『菊とポケモン』が非常に高い到達点を示すが、日本国内では宇野常寛『ゼロ年代の想像力』が注目に値する。その中で宇野は「2001年以降の世界の変化に対応した文化批評は国内には存在していない。それは現在、批評家と呼ばれるような人々が、この2001年以降の世界の変化に対応することができずに、もう10年以上同じ枠組みで思考し、時代の変化を黙殺しているからである。」と激しい口調で先行世代の批評家を非難し、「端的に本書の目的を説明しておく。まずは90年代の亡霊を祓い、亡霊たちを速やかに退場させること。次にゼロ年代の「いま」と正しく向き合うこと、そして最後に来るべき10年代の想像力のあり方を考えることである。」と高らかに宣言する。この「非難」と「宣言」こそ新しい時代の漫画の位置づけを物語っている。さらに引用の先の部分で「彼らによって未だに10年前の、それも国内カルチャーのごくごく一部の想像力が最も最先端のものであるかのように紹介されている」現状に対する失望を吐露しているが、例えば十年一日のごとく『新世紀エヴァンゲリオン』を取り上げそれを最先端のように持ち上げる批評家などがそこに強く意識されているはずである。漫画やアニメに触れることはあっても、「文学」基盤の批評という枠組み自体をかえることなしには時代を語るができなくなっているという自明の事柄を今頃になって確認しなければならないというジレンマが強く感じられる。

漫画が海外で認知されるという流れの中で、日本政府もジャパンコンテンツとして熱い視線を注ぎ始めた³⁾。このような中、本稿執筆チームは、各国文化間における差異を把握し、交流を進展させるための「国際読書会」⁴⁾を企画。ツールとして、漫画『ONE PIECE』を選出した。これには二つの理由がある。一つは単純に、この作品が日本をはじめとして近隣の東アジア諸国でも強い人気を誇っているためであり、二つ目の理由はその主題と大きく関わっている。『ONE PIECE』は、主人公の少年モンキー・D・ルフィが「海賊王」になることを夢み、仲間を集めながら最果ての地を目指すという物語である。未知の場所へと踏み込む中で、さまざまな異文化間の軋轢が生じるが、そのつどルフィはそれを乗り越えてゆく。「異文化交流」のテキストとしてずば抜けたバリエーションとリアリティを有している訳である。本節では、日本と日本以外の東アジア諸国の漫画事情を『ONE PIECE』に関わらせながら概観する。

日本近隣諸国でも、アニメや漫画が大人気であることはよく知られている。たとえば「東洋経済オンライン」(2013年1月24日13時10分)は、「『ONE PIECE』が一番人気がありますね」という若者の意見を伝えている。これは「中国人のある若者の意見」に過ぎずデータの裏づけはないが、廈門大学嘉庚学院で2012年度に289人⁵⁾の中国人学生に対して実施された調査によっても、その人気の高さを確かめることができる。「日本のアニメーション／漫画で好きなものを好きな順に5つあげて下さい。」というアンケート(項目は列挙せず、自由回答形式による)の問いに対して、以下のような集計結果が得られている。①『クレヨンしんちゃん』75人 ②『ドラえもん』65人 ③『ONE PIECE』57人 ④『スラムダンク』53人 ⑤『名探偵コナン』51人。ちなみにそのほかには『NARUTO』『犬夜叉』『ポケモン』『テニスの王子様』『ちびまるこちゃん』『セーラームーン』のように続いている。今後の継続的な調査が望まれるところである。また、「中国江蘇省にワンピースのテーマパーク建設へ」という衝撃的なニュースが「人民日報」(2012年5月21日)で報道されるなど、注目の度合いが高いことに関しては日本に勝るとも劣らない勢いである。

台湾においては、「台湾における日本漫画の流通、浸透ぶりは、もはや日本と変わらないといって

も良いほどである。』⁶⁾という盛況ぶりを誇り、『ONE PIECE』人気も高い。2013年夏に本学に夏期研修のために訪れた大学生(台湾 長栄大学)たちの多くも『ONE PIECE』に強い関心を示していたし、『ONE PIECE』公式HPには「現地時間11月21日(木)朝、アメリカ合衆国の著名な日刊紙の一つ“ニューヨーク・タイムズ”のフルカラー全面広告に満を持してルフィが登場!さらに、その翌朝には、台湾でも“中国時報”の全面広告にルフィが登場!」というニュースが紹介されている。これは、日本でも繰り広げられ各地の新聞に『ONE PIECE』が前面広告で登場する「新聞ジャック」という広報戦略である。また台湾で2014年に「ONE PIECE展」の開催が決定している旨の告知も見られる。

また、経済産業省監修のアジアトレンドマップの2013年4月18日ヒューマンメディア制作の記事が、韓国での日本マンガ人気の現状を以下のように紹介している。

韓国には、もともと「マンファ」と呼ばれる独自のマンガ出版が存在していたが、1998年から韓国の青年マンガ誌に日本のマンガが掲載されるようになり、「釣りバカ日誌」、「沈黙の艦隊」、「クレヨンしんちゃん」といった日本のマンガが韓国でも人気を集めるようになった。現在は「ONE PIECE」、「NARUTO」、「神の雫」、「はじめの一步」、「ハチミツとクローバー」、「鋼の錬金術師」、「GTO」、「HUNTER×HUNTER」、「ドラえもん」など多くの日本人気作品が翻訳出版されている。アジアトレンドマップの「現在の人気」マンガランキングでは1位「ONE PIECE」、3位「名探偵コナン」、4位「FAIRY TAIL」となっている。(2013年2月時点データに基づく)
※2位が書かれていないが、原文ママ

ここにもマンガランキング1位として『ONE PIECE』の名前が挙がっている。もっとも韓国ではその一方で、『ONE PIECE』のコマ内に「旭日旗が描かれている」ことで、韓国のメディアやファンが騒然となったことがインターネット上で広がり、波紋を呼んだことなど記憶に新しい。これも、『ONE PIECE』に対する熱視線の成せる業であることは否定しがたい事実である。

第2節 『ONE PIECE』<言及>史

本節では、日本国内における『ONE PIECE』<言及>史について確認する。

現在『ONE PIECE』に関する書籍は夥しい数に上る。それらは(1)謎本(2)人生本(3)研究の3種に分類可能である。

(1) 謎本

アカデミックなものではなく愛好者が自由に感想を述べたり伏線を読み解いたり、という類のもので、エンターテインメントの領域に属する。最も早いものは『ワンピースキャラクター心理分析書』(ローリング・ストーン著 2001年11月 フットワーク出版刊)であり、次いで『ワンピースの秘密』(北沢ワンピース研究会著 2002年10月 データハウス刊)、『グランドラインの歩き方』(ワンピース海賊団編 2003年4月 21世紀BOX刊)と続く。従来さまざまな漫画作品に関する「謎本」を刊行し続けてきた(株)データハウスはその後、『ONE PIECE』に関して同種の「謎本」を量産してゆく。その後、多くの出版社が『ONE PIECE』本に参入してくるが、それには次項「人生本」の登場が大きく関わっている。

(2) 人生本

『ONE PIECE』に関する「人生本」は、『「ワンピース」に学ぶ仕事術』⁷⁾を嚆矢とする。これを皮切りに、ルフィやその一味たちの主に人間関係力—コミュニケーション力・リーダーシップ等々—に注目した書籍が出始める。一見奇を衒ったかのようにも思われるが、実のところ、本稿後半に述べ

るように、読者が人生論的にアプローチし得る点が『ONE PIECE』の最大の魅力の一つである。その後、『漫画ワンピースは、これからの時代のビジネスバイブルだ!』（徳永泰 2011年7月 イーセミ出版刊）『ルフィの仲間力「ONE PIECE」流、周りの人を味方に変える法』（安田雪 2011年9月 アスコム刊）『ウソップの言葉（ハート）The Heart of ONE PIECE』（遠越段 2012年3月 総合法令出版刊）などその後多くの類書が現われ、平衡して前項で触れた「謎本」の勢いも留まらず、飽和状態となった。

(3) 研究

学術的立場からの『ONE PIECE』研究は、本稿執筆の時点（2014年1月）において確認しえるものとしては平居謙「冒険の誕生『ONE PIECE』論：ふたつの短編「ロマンスドーン」との比較を中心に」（「保育研究41号」本学短期大学部2013年3月）「旧約聖書『ルツ記』と漫画『ONE PIECE』：芸術観光学の理論と実践⑤」（本学年報 前号2013年6月）小野哲弥「悪魔の実 マーケットリサーチ」（産業能率大学紀要34-1 2013年9月）平居謙「『ONE PIECE』と聖書」（「保育研究41号」本学短期大学部2014年3月）のみであり、独立した1冊の研究書⁸⁾となるとまだ1冊もない。今後の批評・研究の興隆が期待されるところである。

第3節 架空世界と現実の均衡 — 『ONE PIECE』の魅力①

日本国内同様、あるいはそれ以上に加熱する日本マンガの浸透というこの状況の中で、「国際読書会」は行われることになる。そのためには、作品そのものの持つ魅力と可能性とを事前に確認しておく必要がある。

『ONE PIECE』の魅力とは何だろう。身体がゴムのように伸び、その弾力を持って世界に抗う主人公ルフィ。敗退することもあるが、多くの戦闘において圧倒的な強さを発揮し、追い込まれている小さな存在を救出することでカタルシスを読者に与える。基本的にはこの基本主題が延々と繰り返されてゆく。弱者救出の構図は多くのヒーロー物に共通する特徴であるが、『ONE PIECE』も間違いなくこれを踏襲している。冒険物語でありながら同時に救済の物語であるという特徴は、作者の尾田栄一郎も好むという『エルマーのぼうけん』⁹⁾をも想起させる。また、本稿代表筆者が本学年報の前号で追求したような『旧新約聖書』の如き古典を下敷きとした展開も、『ONE PIECE』の魅力を奥深いものにしていくといえる。

前項に触れたように、執筆チーム代表はこれまで『ONE PIECE』に関する人生的・倫理的なアプローチを中心に行ってきたおり、それに関しては第4節において詳説するが、ここでは設定面や表現面に関して書かれた前掲論文「“悪魔の実”で読み解く『ONE PIECE』のメガヒット要因」¹⁰⁾の内容に少しく触れておこう。その中で、小野田哲弥は「海賊」「大航海時代」等の設定も「リーダーシップ」「友情」「勝利」等のコンセプトも、『ONE PIECE』の独自性とは言えず、その公約数を排除してゆくとともに「素数」（つまりは独自性）としての「悪魔の実」の存在があると断言する。小野はこの「悪魔の実」に関して徹底した分析と考察を同論考の中で行っており、極めて興味深い。

もっとも、物語の中に異類が現れたり、何かを口にして特殊な能力を身につけたりという話自体は『ONE PIECE』独自のものではなく、例えば中国系アメリカ人の民俗学研究者が編纂した『中国民間故事類型索引』¹¹⁾にも多数紹介されている。これはフィンランドのAT童話分類法を取り入れた書物で、中国の民間故事を世界に披露している。そこには、異類から人間への変身譚、あるいは人間が異類へと変身した話が散見する。蛇あるいは狼などが男性に変身し、女性と結婚した話は、『ONE PIECE』に現れる「墓場のアブサロム」のナミへのプロポーズを想起させる。その女性が最後には蛇やはさみや白菜など15種類の物に変身するという奇妙な結末も用意されている。蛙が人間の姿に変わったり、人間がロバに、農婦が棒杭に変身するなどのケースも散在している。

異類と人間との相互変身の話だけではなく、人間が魔法の食べ物を食べたり、魔法の水を飲んだり、魔法の何かの道具を使ったりすることによって、異常能力をもつようになるという話もある。これなどはまさに『ONE PIECE』の基本構造そのものである。身体に大きな変化が出てくる大力士の物語では、主人公が魔法の水を飲んだ後、力が倍増する。また魔法の矢や銅銭が出てきて、物語を神秘的な方向に導いていくという話もある。日本や諸外国にも変身譚や異類の物語はあとを絶たない。

『ONE PIECE』では、このような異類=能力者が存在しているにも関わらずそれが「メインテーマ」となることはない。『ONE PIECE』における能力者は、その名が示すとおり常人を遥かに凌ぐ戦闘能力におけるいわばエリートである。しかし、物語内において「能力者であること」は一つの属性に過ぎず、「能力者」は存在し必ずしも特異な存在であるとは言えない。従来「変身・異類譚」であれば、その存在を巡る物語が語られた時点で「譚」そのものの役割が終了するが、『ONE PIECE』の場合はそれは一つの前提に過ぎない。異類たちがまさに呉越同舟で冒険を続けてゆくというように、「非日常的存在」と「現実の船による航海」に統合したところに『ONE PIECE』の真骨頂が存在する。これは、いかに知的・能力的に優れていても結局誰一人有効な解決策を見出せないまま地球という船に揺られてさまよう「人類」という頼りない存在そのものの喩ともなりえている。多くの異類たちを、海賊船という「現実的な乗り物」が運んでゆく。異常さ平凡さ、架空世界と現実との絶妙な均衡の上にこの物語の本質は緊張を保ちながら存在し続けていると言える。しかし、これとてオリジナリティーという観点からみれば、既に先行作品『DragonBall』のなすところである。

第4節 人生上の難問の提示 — 『ONE PIECE』の魅力②

『ONE PIECE』の最も魅力にあふれた特長は、人生上の難問が集中的に提示されるという点にある。それは、友情とか勝利、努力といったような観念に還元できないリアルで複雑な問題である。

たとえば『ONE PIECE』最初期から常にルフィの傍にいて彼を補佐する少女ナミとの出会いのころの物語。ルフィは、偶然出会ったナミに心惹かれ仲間に誘うが、ナミは断固として助力を受け入れることをしない。実は彼女は、魚人族のアーロンという独裁者の下に長年軟禁状態に置かれているのだが、助けを求めることで他人のルフィやその仲間まで巻き込むことを彼女はよしとしないのである。結局、彼女は助けを請うことになる。ナミが万策尽きてルフィに「助けて…」と泣き声で言い、ルフィが「当たり前だ！！！！」と絶叫する巻九のシーンはつとに有名である。異常な困難に満ちた救出劇の中から、さまざまな難題が提出される。

上記のシーンは、私たちの日常においては「他者にどのように関わるか」という問題に置き換えることができる。もう少し詳しく言うならば、「自分自身の弱さをどのように他者と分かち合うことができるか」という問題を読者に投げかけてくると言える。国籍・性別・年齢を問わず「友人」「他者」との関わりは、大きな問題のひとつであるが、『ONE PIECE』はまさにストレートにそこに切り込んでくる。この種の人間関係は日常茶飯的に起こる問題であるが、ナミの救出劇のような形で極端にデフォルメして示されない限り、読者はそこに目を留めることをしないままに通りすぎてしまう。軟禁する側の独裁者も、救出する側のルフィも異常に戦闘能力が高いため、コミックスの何巻をも費やした救出の戦闘シーンが繰り返される。前節で述べた「架空世界」（現実にはあり得ない超弩級能力者同士の戦闘）と「現実」（友達に素直に助けを借りること）との絶妙な均衡という構造が、より大きな感動の創出を担っているということが可能である。というのも、その解決のプロセス自体が大きなドラマとなり読者に届けられるわけであるから所謂「溜め」の部分が大きいほど結末における開放感が大きくなるのも当然である。

ナミの救出劇から提示される「難題」は、これに限らない。たとえば、後に読者は、ナミの育ての親ベルメールが、独裁者アーロンの無法な徴税を拒んで銃殺されたという事実を知ることになるが、

これはインターネットの掲示板等で賛否両論の渦巻くシーン（巻九 第78話）である。というのも、ベルメールは、当時育てていたナミとノジコを「自分の子供ではない」とさえ言えば銃殺されることはなかったからである。しかし、ベルメールは嘘をつくことを拒んだ。ここから読者は「言葉の重み／命の重み」という問題に思いを馳せざるを得なくなる。「命を守るためになら少々の嘘は許されるか」。このように書くと、このシーンはキリシタンの踏み絵の問題と同質のものであることさえ明らかになる。代表筆者は本誌前号で『ONE PIECE』は聖書の影響を受けていることを既に詳細に論じた（本稿第2節「研究」の項参照）が、素材やネーミングにとどまらず、発想そのものにも宗教的課題は染み込んでいるとみることが可能である。

さらに、ナミに関して言えば、彼女は後にアローンの兄貴分であるジンベエという男と知り合いになりジンベエから（巻六十四-第627話）陳謝の意を表される。これは、日常レベルで考えれば「自分に害を加えた人物の関係者」との関係を問うものである。最初からその事実を知っていれば積極的に関わることも少ないのが現実であろうが、親しくなった後にその事実を知った場合、人はどのように考えるべきかとなると問題は複雑化する。

その魚人島では、『ONE PIECE』最大の主題の一つである「過去の差別事件」への態度という問題が提示される。長く差別と闘い続けてきた魚人島の重要人物がよりによって「差別の事実」を未来に伝えるな、と遺言するのである。彼らには彼らの言い分があって、「伝えること」によって「後代に怒り・恨みが増幅する」ためであり、それを防ぐには「非伝達」が必須であるというのである。この認識は、明らかに「歴史を知ることがよしとする」現在の社会の認識とは異なっているが、「非伝達」という考え方を直ちに否定するのではなく、読者が自分自身で検討することによって新たな方向が生まれてくる。その他、「人生的難題」の問として、他にも「目に見えないものの価値」「自己犠牲」「プロ意識」「親」「先行世代」「リーダーシップ」等の問題提起が不断になされている。

どんな漫画であっても、いくつかの人生上の問題を含んでいるものであるが、『ONE PIECE』ほどに集中的にその種の問題を読者に提示し続ける作品は稀であり、これこそがまさに『ONE PIECE』の最大の魅力の一つであるといえることができる。

第5節 日本語教材としての『ONE PIECE』

本稿執筆チームは全員、継続して中国人学生に対して日本語および日本文化を教育する立場にある。冒頭にも述べた通り、厦門大学嘉庚学院からやってきた中国人留学生の中には『ONE PIECE』をもっと読みたい、『ONE PIECE』に魅せられて日本語に興味を持った、という学生も珍しくなかった¹²⁾。今後『ONE PIECE』人気がどのように推移するか¹³⁾はともかく、日本語・日本文化の教材として大きな可能性を有していることは否定しがたく、このことに関して最後に述べておきたい。

優れた日本語・日本文化教材の条件とは何か。執筆チームによる「日本語・日本文化教材5か条」は以下の通りである。

- 1 人口に膾炙しており一般に入手しやすい作品であること
- 2 学習者が興味を持ちそうな内容、学習意欲を引き起こしてくれる作品であること
- 3 時代や流行にあまり影響されない作品であること
- 4 日本人の一般的な語彙に近く、学習者の実生活にも沿った言葉が使われていること
- 5 はなはだしく低劣・俗悪な語彙が含まれておらず思想的に偏りが無いこと

1と2に関しては日本でも16年以上連載され東アジアでも人気であることから十分に条件を満たしている。3は『ONE PIECE』のその虚構性が時代からの自由さの根拠である。最近のコミックで

は福島原発を思わせる風刺的なシーンも頻発するが、原発事故処理は短期収束可能な問題ではないだけに、「一時的な流行」に左右されるものとは言えずしたがって3に関しても問題はない。4に関しては、『ONE PIECE』は全く架空の国が設定されており舞台も日本ではない。しかし若い登場人物が中心であり、彼らが作品中で話す言葉はほぼ現代日本語として極めて一般的な領域に属すると判断することが出来る。

日本語学習教材として問題が生じるとすればそれは項目5に関してである。「思想的に偏りがある」¹⁴⁾わけではないが、確かに極めて乱暴な言葉が頻出し、留学生がそのまま真似ると問題になるようなものも多く、条件の前半部に抵触する。しかも、漫画の登場人物たちは、そのような言葉を「悪気なく」用いているわけで、そこに読者、とくに日本語学習の初心者が混乱する原因がある。例えば次のような事例がある。

『ONE PIECE』ファンのある留学生は、「テメェ」「オメエ」「クソジジイ」といった類の、登場人物たちが頻用する言葉を使ってみたくて仕方なく、留学先で教師にその可否を尋ねる。ところが、そんな汚い言葉は決して使ってはいけないと直ちに否定された。登場人物たちは平気で使っているし、使われた方もそれほど気にしていないように見えるのに。と彼女は納得がゆかない。

このような場合、教員が『ONE PIECE』の内容と大まかな語彙体系を感知的にでも掴んでいれば「それは、『ONE PIECE』の中では親しみをもってお互い使いあっているが、そもそも海賊という荒っぽい男たちの世界でだけ通用する特殊なコミュニケーションであり、そのまま真似ると驚かれること」を、作品背景と関わらせて説明すれば彼女の不満はすぐに解決するはずである。

日本語教師が「アニメも見ない、マンガも読まない」¹⁵⁾という驚くべき事実がある報告書の中に見られた。『ONE PIECE』をはじめとする数々の漫画が、絶好の文化交流教材としても東アジアの海上を漂っている。それに乗船することが、国際交流を進行させる上での一つの選択肢であることは間違いない事実である。

おわりに

本稿では、日本を含めた東アジア諸国の漫画事情、『ONE PIECE』人気を踏まえ、漫画『ONE PIECE』の魅力を一瞥した。本稿におけるささやかな確認作業の延長線上に実施が予定されている「国際読書会」に関する分析と報告は次号以降、機会をみてこれを行う。

註

- 1) 鶴見俊輔『限界芸術論』や呉智英『現代マンガの全体像』・四方田犬彦『漫画言論』などの優れた漫画論がすでに存在したし、吉本隆明も折に触れ漫画への言及を継続的に行い、これらは後に大部『全マンガ論』にまとめられることになる。また、夏目房之介は『マンガ学への挑戦』第9章「マンガ批評小史」の中でマンガ批評の全体像を明らかにしようと試みている。
- 2) 山口直樹（北京大学科学と社会研究センター）は『市民科学第22号』（2009年2月）の中で、中国においても主文化と次文化（サブカルチャー）の入れ替わりが既に起こっているという、遠藤誉の『中国動漫新人類 — 日本のアニメと漫画が中国を動かす』における指摘に注目している。
- 3) 例えば日本政府観光局（JNTO）は2011年「ジャパン・アニメ・マップ」を作成。日本の魅力を新たに発信しようと試みている。これは人気アニメを活用した初の全国版案内マップである。
- 4) 「国際読書」の為の下準備として、2013年度内に、中国人留学生、日本人学生のグループ別に、計15回の討論会を行っている。
- 5) 内訳は紙によるアンケート217人 電子メールによる回答72人であった。ちなみに ①『クレヨンしん

ちゃん』50人(電子)+25(紙)=75人 ②『ドラえもん』36人(電子)+29(紙)=65人 ③『ONE PIECE』39人(電子)+18人(紙)=57人 ④『スラムダンク』30人(電子)+23(紙)=53人 ⑤『名探偵コナン』26人(電子)+25(紙)=51人。また、日本のアニメについて中国のネット上で挙げられているランキング(<http://www.zerodm.net/dmphb.html> 参照)によれば1位は『ONE PIECE』で、2位は『NARUTO』、3位が『FAIRY TAIL』である。

- 6) 日下翠『漫画学のスズメ』 p272
- 7) 2010年データハウス刊 平居謙著
- 8) 本稿と並行して進行中の『ワンピース観光学』(仮)はデータハウスより2014年刊行予定。観光学の立場からの『ONE PIECE』に関する研究。
- 9) R・S・ガネット作 わたなべしげお訳 (原題“My Father’s Dragon”)
- 10) この論考は、非常に作品の魅力に関する著者の慧眼を感じさせるものである。そこには『ONE PIECE』の魅力として 1 潜在的欲望の充足 2 可愛いキャラクター 3 能力者と普通人の中間性 4 レトロ性…パロディ性などの指摘に満ちている。
- 11) 『中国民間故事類型索引』 丁乃通 1983年11月 孟慧英 董曉萍李揚訳 春風文芸出版社
- 12) 平居謙『ワンピースに学ぶ交渉術』(2012年 データハウス刊) 巻末座談参照
- 13) 厦門大学嘉庚学院では現在、『ONE PIECE』人気は沈静化し、最近あまり話題には出ていない。教室内で学生たちは『男子高校生の日常』のようなユーモラスな漫画が好まれている。また、小説の『図書館戦争』に注目が集まっている。
- 14) インターネットの掲示板等に、「作者の尾田栄一郎がキリスト教徒であるかもしれないこと」を恐れるかのような発言が散見する。真偽は措くとして、作者の思想・信条を以って「思想的偏り」と考えるならばあらゆる文化・芸術は教材とすることが不可能に近い。
- 15) 熊野七絵・廣利正代「アニメ・マンガ」調査研究 ― 地域事情と日本語教材 には以下のような驚愕のエピソードが紹介されている。

では、このような現状に対して日本語教師はどのように対応すればよいのだろうか。2006年度にインドネシアで行われた「東南アジア日本語サミット」における各国からの報告で日本のポップカルチャー、特に「アニメ・マンガ」の爆発的な浸透ぶりを目の当たりにした南山大学の坂本正氏は「ポップカルチャーという窓口を通して、日本語の学習を始めた若者がこれからどんどん出てくると思われるが、我々日本語教師はそれに対応していつているのであろうか。アニメも見ない、マンガも読まない日本語教師は学習者が一体何のことを話しているかさっぱりわからないであろう。日本語教育でアニメ、マンガだけを教えることはあまり現実的ではないが、アニメ、マンガも教育内容の一部に取り込むような柔軟なコースデザインがこれからは望まれよう。」(坂本2006:56)と述べている。日本語教師自身が「アニメ・マンガ」の現状を把握し、日本語教育への活用を真剣に考えるべき時期に来ていると言えるだろう。

戦後まもなく、という時代であればともかく、現在日本語教師の立場にある者の多くがこのような状況にあるとは考えにくい、もしそうだとすれば、憂慮すべき事態である。

A Role *ONE PIECE* Plays as a Bridge across Japan and East Asian Countries

HIRAI, Ken · WANG, Juan
CHEN, Hung Wen · YAO, A Ling

A serial comics called *ONE PIECE* is extremely popular not only with the Japanese audience but also with the audience abroad. It is especially well-received by young peoples in East Asian countries, so much so that some of them start learning Japanese or doing research on Japan. One of the charms of *ONE PIECE* may be that both the fictitious and real worlds coexist in the stories. Another charm is that the delicate balance between the two is always well kept. Still another appealing point is that while reading *ONE PIECE*, the readers are presented with many kinds of problems that they are likely to encounter and be required to solve in their real-life situations. It is quite possible that such features mentioned above will naturally make *ONE PIECE* an excellent and valuable material to be used for academic as well as educational purposes, to say nothing of its important contribution to international exchange with our neighboring countries.